

開明
小説

春雨文庫

初編

下



A416
2

春雨文庫下之卷

東京

松村春輔著述
大久保春驪校訂

第二回

花の都の三條小往来も近き木屋町小外の構へ
船板小渋い好まの漕り門路次も寄石鞍馬の靴
脱見越への松も蒲團も若く寝ころび姿の山の姥を
眺め結邪六と植換へ桐の屯んどの二株小日脚を

48-7520

除く掃庭の這方の座鋪ざいば川附かわづと総すべ二間にまり
三間さんまをうり廣ひろうねども狭せまうね一寸氣取いちゆんきとつ
普ふ傳でんの結構けいこう節ふしあ板いたの廻まわり採と小冬こふゆあ硝子がくしの
障子しょうじでも建てあるるあき處ところを折をしも文月ふづきの末すえ
あき総すべと葭戸やと小入こいれ替かゆる風かぜ入いるよ次つぎの間ま小
二八にやちをうりの婀娜あなま者ものめと名なを君香きんかと喚よるが
鉦子かねこ縮ちぢの多おほあもる浴衣ゆか小こ緋鹿ひかの子こと結緒むすぶを腹合はらあ
せゆと平常ふつじやう茶ちやをだらりと結むすんど其形そのかたちで顔かほを

あつと居ゐるととらん門かどよう入いり来きる二個ふたごの藝妓げいぎ
名なハハ君香きんかもんま粧ま最中さいちゆう子こ君きみヲヲ姉あねもんもん
上の藝者げいしやをきつての通言つうごんを姉あね姉あねの沢さわはあきお拵もちひが宜よろくき
君香きんかも懸かりて舞まひあうりり被か敷しくひああと知しるべし
来きど子こエえの座鋪ざいばの帰かへりうへ辰たつみ又また例れいのお店みせ子こ乳ちもの
涼すずととつれが速はやくゆと一寸顔いちゆんかほを足あし小寄よつと
のサ何なにとと暑あついいトト中ちゆうアアの子こ子こエえ君きみアア内うち小居こゐてさへ
今日けふハハ余程よつほど嚴げんかかりりと歩あ行ゆのちち堪たららああと
らうらう空くらここ草くさでも解とか涼すずとト側そばはは何なにる團だん扇せんを二

奉取つとてきりあがら君丈わいとも宜く来りか呉
だりこ子工實の今ふ鳴び小進中うと思つと知り小フシ
あつうの髪結さんご言辰ホニ髪結さんと言へか前
とんの今日の髪矢張か安さん名女かきひ久君い上
先刺三井屋のか内義とんが来り是非借せと言
つと子私の天窓をか持遊小為と往つとサ辰ヲヤ
理き根の恰好が違つと思つとご前もんよか
例のよき子工心光さんかア比風が宜く似合ふよ那の

か内義とん何招して商賣人の素足サ辰ヲこれ
愁うと日の暮あけのうち小往りやアあの君ア井
真実小鳴び小進中うと為と知と今夜ヲ控
むごお在と言ふごのゴア子ヲヤア此嬢が美顔小
あつと止るんご言まやア何ぞ譯でもあるのう
君ア宜い支があるんご言サ小待ヨもあの宜い支
と言ふあア花合でも為ゆうと言ふご言らうが此暑
のう小子工か辰さん辰アのう蚊小喰りまごの禁厭

ぞと言ふく此様小蚊が歩くるら歩まある物う子ト
吐一のうち小湯殿うら今何ういふ形を
浴衣を體へ巻付あぐら且那う一た一個の男が
燈捕人這うのうとあるを見と長ヲヤ島もんお前をん
うお在あまのうんぞ在ゆせう人此が居るそ
取うと食をめとも言をぬくうう宜いどやあへん
長ア并然ふトやありやんが夫あう然あう君香
もんが言つと聞うせまは宜い小子エ小光さんかあ拾

私もまあ温飽の粉のき糸も顔へあませうんま
何うやうとものごと子エあう、皆イヤあんやうか化粧を
さあつると目移りが為る困るうらうらうとキニク
あうて来このでううお前方今夜の附合のう居る
貰ひぬへどやあうあいの其勢う好む物を何でも
端るうら言ひぬせへ辰小光さんの豚鍋が宜うございの
あうはトサ小ヲヤえんうお在ヨ私まわア豚ごうの實味小
懲々為るんでありあまのう辰利う小光さんの豚の

咄々余程可笑しうら君香もん咄々お見あまの
 君ヤ我々私まぬちやど知らあんどヨッ「小光が懲ると
 言ふの余程多変ざらううら何だぞ咄々笑せらるが
 宜の余少ナ面白くもあんともあいの支とありおまはら子
 十日をかり補小備欠のお内義ちんおゆー咄々が
 何のく度敷であく往くと平常の第火鉢の在る
 知小三人をかりお酒を飲んご居るお客が私を無
 理小引張くく往つてお酒をやとく強るんく何う

春雨下

阿聞ダ進退も
 壮士ダ意中
 應ホ



中のまヨ史も中んざう知らあ顔でも在り中ん
のふか内義をんの前も何ると思つらら愛敬を
翻した史も言えふ居まはと揚勺の果ふ生煮
の豚の身を絞んど喫ろと言ふら只吾とと言つ
たら復ても立つと思つら断物ごう堪忍しそ
か呉あそのと言つらも聞らあのごく只人押込そ
そのふまらうら仕方ごあふ迹歩そと流ら
追うけそあるど中ありあへんら這奴捕よらちや

大妻ごと思つらう雪隠の中へ迹込んで裡ら
耽り押へそ居るそお思ひあその顔その変れ
掃除登さんぐ来そ批撥を入るそ糞桶の中を掻き
出そどやアありあへんら其時こそ私やア去實
ふ一生懸命の声を知そ我知そ世助けそか呉
あ人引と言つらか内義をんが強そ来そ雪隠を
出そそ呉まらら其時よや私顔が真まらふ
あらそ居まららとサ史どりんごうらお客も悪の

九條殿ある貸附の頭と執るのそあらしむる事
の執政より竊う内意を命じらるる國と愛する
有志の輩を捕縛させたるのそあらしむる事
種々の奸謀を做したる事ハ數あるおと爲る
事毎ふ其圖の過りて家ハ巨業の財を蓄積と
既ハ龍兵衛権大尉と喚ぶ追ハ經昇と浮雲
の富を極むるゆぞ幸妻も有り妾もある事
頃祇園新地ある三井屋と言ふ家の抱ふ君香

赤雨下ハ

といへる舞子と云許多の金もと清出
木屋町の別宅小田ひきまの折々の控所
と為し一ハ即今有志の輩の渠が奸邪の
所行を勝を附狙ふ者あるを速く心
付きしうハ姑く所々ハ身を殺せしむる
有りガ冷しうと云ふ人の由りより
此家ハ竊うハ忍び来りしあり又この下女の
か聞と言はるる有志の方よりハ金も
則

間者ありけるを島田がまこと知らざりける天珠
 適きとぐらたの故あり音官か聞がら糸の絢と
 仕うちふんを付く續べ
 其夜も既ふ初夜も頃持麻をせし島田の側へ
 君香の静くふさし寄つて君モシ且那へアサ這処
 か那まあせのちや蚊が喰ひやせうらま実ふ麻
 のあし蚊帳へか這入あしいやすしヨ。エ。モシ目をあはし
 あしとい言へば子エト覆起さきと島田のあしびと



伸びを為あぐら
 術く起連り
 後此身ア
 衆婦の
 咄と
 聞あぐら
 横ふあり
 ぐら

我^{わが}あ^らは^は寤^ねこ^のや^りサ^セと^と小^こ光^{ひかり}や^あ辰^{あした}の^い何^{どう}様^{よう}
し^し君^{きみ}か^ま前^{まへ}も^んが^し斬^きあ^んぞ^をか^りさ^かし^める^ま
ま^まの^こう^らに^ひ退^{たい}屈^{くつ}の^ごら^うと^まを^もつ^かへ^り
と^んど^あり^やは^せヨ^私さ^やア^まと^座補^ぞぶ^あら^う
あ^るう^ら切^き上^ある^積り^どか^前も^んが^狸を^あ爲^いふ^ま
ま^まの^とん^どと^思つ^こう^ら止^とま^ふ小^こ帰^{かへ}と^まを^りま^や
考^かへ^どう^夫ト^やア^寤る^は空^くと^空の^宜ら^つと^子エ^ト
言^いふ^時か^聞い^徳利^りく^烟を^解と^のを^持ち^きこ^うり

春雨下 十

聞^き且^じ那^なへ^か烟^{えん}の^よの^のが^出来^きま^うら^う寤^ね
ゆ^ゆし^召上^ある^と跡^{あと}の^鯉が^か茶^あ漬^{づけ}と^托を^せる^宿ま^う
さ^のう^今と^あり^と痛^{いた}ま^うら^うゆ^ゆと^あり^こゆ^う
ど^うく^ら温^あ燗^{せん}が^一杯^{ぱい}を^とと^為や^うら^開筈^{はつ}と^まを^り
ま^まの^うら^とも^寤る^七月^{げつ}も^廿日^{にち}が^あり^おま^まら^う何^{なん}
と^やし^も夜^や分^{ぶん}の^余程^{ほど}か^涼と^あり^おま^まら^う夫^ま
ま^まの^うら^は大^{おほ}き^の方^{かた}小^こ托^{たく}を^せる^宿は^猪口^{くち}は^あれ^の
ま^まの^うら^大き^の肥^あつ^と居^いる^かよ^うら^こま^まら^う敵^たで

早んあゝと盃洗の中の猪口とをさるゝお聞が致と
為ちうと〜何様〜とそらぐらうるゝあが亦も徳利
を其雪人々後後せらお聞の慌と我が前〜とて
溢も〜酒を拭きあぐる〜聞ヲヤかう何様あ〜
宜うごぎのやせう子エとんご産相と〜と徳久
利の首が流と仕舞や〜とヨ君徳久利の首をう
ぶやあの子〜と今旦那が自己の體のやう
お把つ〜居るとお作とあ猪口迄ダコレ以覽おは

春下土

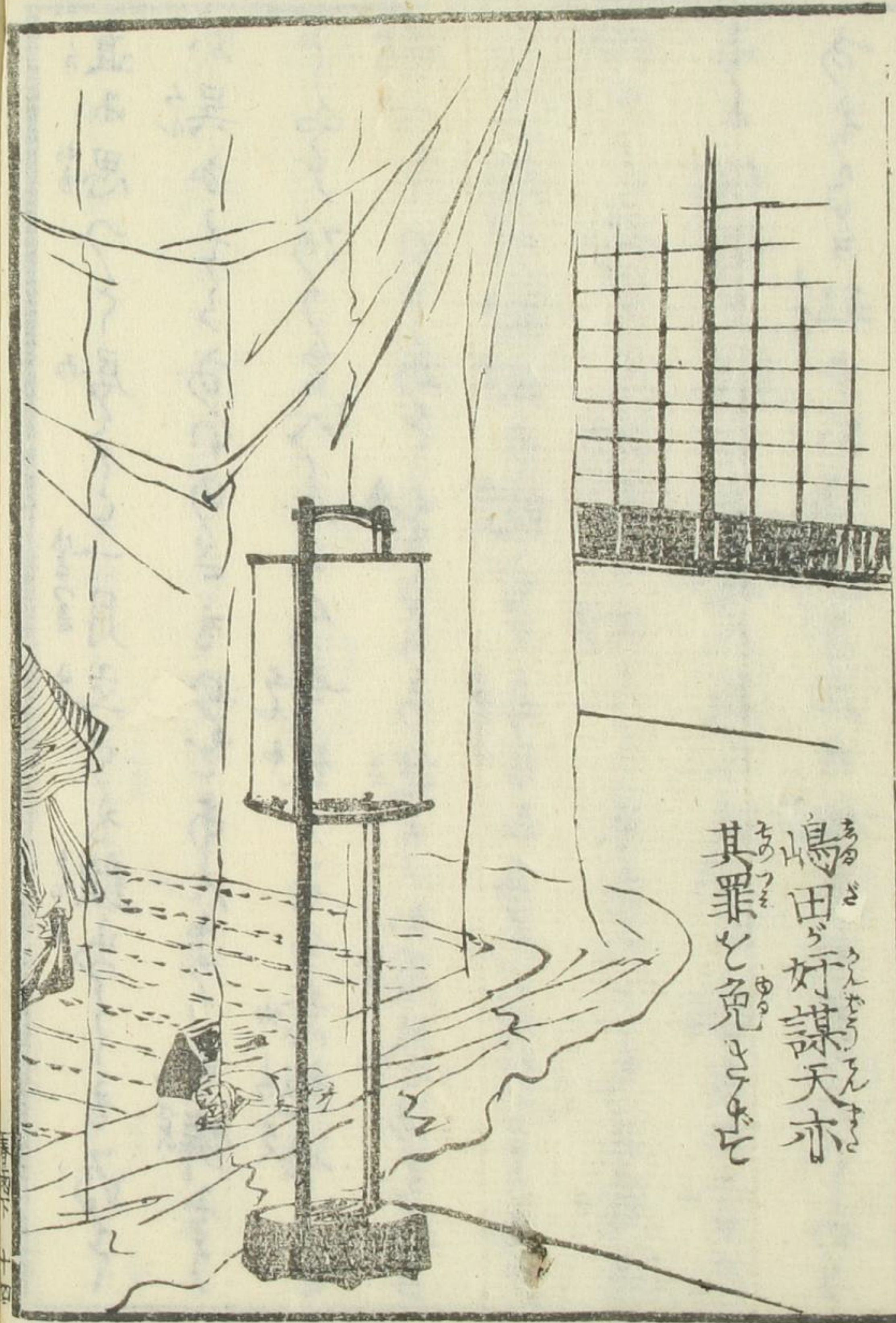
〜と伐らま〜とやうお疵と〜けおあ〜とや
あ〜と氣を付あ〜とや宜あ〜とヨト君香ダ
放心言ふた〜も島田ダ胸へギツクリ来〜と徳コ并
一寸言ふ変も七んお延喜でもお人変ハ言ハお人
ものさ鶴龜〜と聞とれ〜と別お宜か煩とつけ
おま〜と延喜〜とあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と
酒の窓〜と止めお為やせ〜と君七んあ〜と軽く盛つと
飯を〜とあ〜と〜と〜とヨナニ此身ハ飯を喰

こゝめ人かおまの喰つて帰るも宜いぜ君アノウ
私を先刺小光さん遣と喰えんぞありやまは宿ヤ
そりやア大そりま血〜が善うんこの君お〜
まど〜蚊帳へか這入かちのみか聞や別浴
衣を出〜か進よ宿ナニ面倒〜く〜も〜宜い
ノサト言ひつて卧房へ這入りあ〜宿聞や門口
の鎖りの宜うらうノウ聞ハイ私ク先刺あ〜
致〜置〜大出夫泥坊あ〜この遣

入る氣きひの何りやせん〜緩うお休〜あま
つ〜そ〜君香さん〜あ〜宿山様を
せよ君ヲヤ番〜何を為るの〜へ聞ナニか咄〜を
サト言ひつて腹を向り〜舌を出〜あ〜
喰〜〜盃盤を取片付〜立〜行〜其
うち君香の着物を忌文行焼の〜を落暗〜
〜〜餘〜と蚊帳の裡へ這入り〜耻〜せ〜あは
寄つ〜君ヲヤ寤〜か歸〜あ〜入〜あ〜

お吸まんあまのヨト長煙筒あたらとの毒世留きせり小葎あまを吸すひ
付つく作向あまむけ小葎あまを居ゐる島田しまだの口くちへ吞のせあぐら
君ホシきみお前まへせんの實じつがあのトやア何なにもせんお宿しゆく
小大車おおぐるまか輿こし様さまの何なにもせうけきども私わたしらちの
心こころも空あら察さつしとてお呉くれんあまも宜よろさそあま
物ものどの小こヤレ内うちへ使つかと贈越よこせここのあぐらあの人の
前まへにこ此身このみの何なにもまきる夏なつにあぐらぬのと城廓おしろを
とを言いつとて窘こあませとてお置おきあまもるうと私わたしハ正ただ

直ただ小思おもうつと居ゐると一月立ひとつきたとも顔おもてあぐらもあぐら
お呉くれんあまののどもをあんまり可憐かわいそと
とやア何なにもあぐら今いま夜やアその意趣おもひ込こめ
思おもひもいづれめとてまらうと妙まうお思おもひあまのヨ
徳とくソレれ大おほき氣き休やすめ紋もん句くがよまあまのこのころや
何なにも何なにでも此身このみが久ひさく来こねんうち小葎あまを
あま仕し込こめられとて遠とほくねん君きみヲを言いひ
あまの私わたしのお師匠ししやうさんの他ほかあまのんもあ



やまものせを流りうふあゝらと何処に在るものぞ
君いよ何とでもか言ひあまの様うしつ下掛
ちよと流り痛く股が掻きよつて君もつと瘰
あぢもあま程捨つて進まが宜うつと子エ然う
為ううはてす姓がか附あまらうも知まあんど
ものせを流りよく掻きよまを言ふ然と子ごノウサ
乳を吞せりもあまらうう遠方へ寄んか君アと痒の
うの子エトむつらう寄り添ふ其の折しも何う

東下十五

知らせ門の戸のがらりと明き物音の流田を
耳を聳と流ハテナ誰う門口をぬこやうか音が為
うぜ君か聞がよと起き居るものトもあまらう
へんう流イヤ〜聞が流か小居るも門を明やう
等ああ其う人まら〜足音がト言ひつ二個の
起きと見返る障りあめら〜と大の男の図丙
のらつる小君香の流らまら〜戦慄き伏〜轉
づが流田も俱小驚き〜脱る道の何うぞれが

準備の一刀抜きつけらる此場の結局奈何あらん
其委しきを知らんとあはるるに附録第二輯の初め
解出まを看とあらるべし

第貳編を島田左兵衛が傳の局と結び夫を
らり引續き節婦孝女の物のつらゆと近世
稀ある真面目を表し頗る珍説を探り併に
せり序次小大部小建ふ最も目出度き春雨
文庫も人情本の部類あらるべしと自然小入

情の極意を知り交際事小迂遠人なるも此文
庫を開きあへるに随つて愛國の志し進
意守るべしとらざるもの舊習ありと即ち
今の形勢を知らざる為小廿年開けぬ往古
の話を綴りし這に櫻雨園主人がまことあり
けり

門入

春湖識

春雨文庫下之終

開明
小説

春雨文庫

第四編より
引續き出版

近世の烈婦孝女乃傳説を
記し面白き珍書あり

松村春輔編輯

復古夢物語

初編より
八編まで出版

這ハ明治太平記の前篇ありて嘉永
六年並米利加使節相冊浦賀へ來船
以來明治元年伏見戦争迄委し
面白き書也

和田定節編輯

参考鹿兒島新誌

半紙本
初編より七篇
迄全部十五冊

此書西国征討の始末を詳細に
書き第一の實録あり

東京書肆

大島屋

弥生門町上ニ番地
武田傳右衛門

010190509430

